
万華鏡

SORA

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

万華鏡

【Nコード】

N4583A

【作者名】

SORA

【あらすじ】

薬師見習いのジンがある事件に巻き込まれる。ジンは姫を助けるために何でも願いを叶えてくれると言う魔神を探しに旅に出た。

出会い

ジンは腕いっぱい壺をいくつも持ち、大人一人が通るのがやっとの小道を走り抜けた。

「ヤバイ。」

ジンは思わず声をもらした。

今頃、師匠カンカンに怒ってるだろうなあ。1時間近く遅刻してる。何でこんな時に限って目覚まし壊れてるんだよ。

ジンは更にスピードをあげてT字路を右に曲がった。

ドンッ！！

「イテテ。」

人にぶつかった勢いで壺を落としてしまった。

文句を言ってやろうと前を見るとジンは言葉を失った。

ぶつかった相手は本から飛び出してきたかのような美しい少女だった。

水色のワンピースにフードつきの上着を着ている。上着の左右をつなぎとめるために付けてあるブローチは不思議な色に輝く宝石が埋め込まれている。

後ろに束ねてあった赤い長髪がさらりとほどけると、少女は慌ててフードをかぶった。「ごめんなさい。大丈夫でしたか？」

そう言くと少女は立ち上がり手を出した。

ジンは黙ってうなずくと、少女の手を握り立ち上がろうと腰を上げた。

「その壺は・・・!？」

少女が急に手を放し再びジンはしりもちをついた。

「イテエ」

「ああ！すいません！」

「いいよ。」

ジンは今度は一人で立ち上がった。

少女はオドオドしながらたずねた。

「あなたは薬師ですか？」

「そうだよ。まだ見習いだけだな。」

ジンは笑って見せた。

「うわっヤベ！じじいのこと忘れてた。遅刻しそうなんだ。」

ジンは慌てて壺を拾い上げた。

「じゃあな！」

ジンはそう言々と走り出した。

少女は何か言いかけて手を出したが遅く、ジンはもう声が届かないくらい遠くに行ってしまった。

師匠

ジンが急いでドアを開けると金色に輝く鳥がジンにぶつかって消えた。

次の瞬間、ジンは手足がしびれそのばに崩れ落ちた。

「フオフオフオ。」

「その笑い声はじじい!!」

ジンが叫ぶと天井から一人の老人が降ってきた。

その姿は白いひげと髪が床に引きずるほど長く、顔中しわだらけでどれだけ長く生きているのか想像もできない。

「遅刻するからこんなことになる。」

老人はそう言うので口から紫色の粉を出し、その粉を床にさらさらと流しながら魔法陣を書いた。

老人がそつと目を閉じ手を魔法陣に向かい振りかざすと、紫色だった粉は金色に輝きやがて白鳥の形にとどまった。

「遅刻した罰じゃ。問題、薬師とは何じゃ？」

「複雑に調合した薬を使い、あらゆることを可能にすることです。」
「うゝん。」

老人は首をひねった。

「薬師は魔法使いとはちと違う。まだ、お前さんはそこんことをよく分かっておらんな。」

「でも、薬師になれるのは魔法を使える者のみ！」

「そう。薬師は薬に魔法をかけ、それにより魔法より数段強力な力を引き出すことができる。ただし！その薬を調合できるのはわずかな魔法使いのみ。お前は選ばれた。だから遅刻をするなんぞもつての他じゃ。」

「はい。師匠。」

師匠と呼ばれた老人はくいつと指を曲げると、白鳥がジンの上をクルクルと飛び回りジンにかかっていた魔法が解けた。

「師匠、そういえば今日女の子にぶつかっただ。赤い髪の女の子。珍しいですね。それで遅刻しちゃって。」

ジンは頭をぼりぼりとかいた。

師匠は杖を取り出しジンのおでこをさした。

「寝坊をしたくせに何を言ってる。」

師匠はそう言うその後ろを振り向き柵の上にある壺をいくつか取り出した。

「・・・赤い髪。王族の娘だな。」

師匠はぽつりと言った。

「えっ?! 師匠知ってるの?」

「ああ。昔、王宮に仕えていた時があつてな。王族の娘がこんな町外れに何のようかのお。」

「王宮かあ。行ってみたいなあ。」

「ちよいと調べてみるかの。」

師匠は大きな水がいつぱいに入った壺を部屋の真ん中に運んできた。その壺は銀色で魔方阵が所狭しと書かれていた。

ゲゲツ。鏡の壺だ。

この壺ならこの国の中ならどこでも映し出す事ができる。

どうりで寝坊したことがばれてたはずだよ。

師匠は壺の中の水をかき混ぜると息を吹きかけた。

「さあ、見えてくるぞ。」

師匠は言った。

壺には今朝ぶつかつた少女が街角で見をひそめているのが写っていた。

「この少女か?」

「そうだよ。ほら、赤い髪が見えてる。でも、何であんなところに隠れてるんだ?」

「あれは王の一人娘ノア様だ。たしか、オードリック国のエデリイ王子との婚約が決まっただはずだ。」

「どうみても俺より若いのに婚約かあ。大変だな。」

「確かにお前は18歳でノア様は17歳。ノア様の方がよっぽど大人じゃのう。って、そんなことはどうでもいいんじゃない!」

「何だよ急に。」

「問題はなぜあんなところで隠れているかが問題なんじゃ。」

「結婚が嫌だったんじゃないの?」

「とりあえず! わしはでかけてくる。今日はこれでおしまいじゃ。」

師匠はそう言うと言いつつ慌てて外に飛び出していった。

追われているのは誰だ

師匠がいなくなると、ジンはため息をついた。
お姫様が何だっけ言うんだ。

師匠は弟子より姫が大事なのか？

・・・大事だろうな。

ジンは再び鏡の壺を覗き込んだ。
すると姫がこちらを見つめている。

「さっきの男の子でしょ？」

ジンは驚いてしりもちをついた。

なんだ。

こっちは見えていないはず。

ジンはそつと壺の中をのぞきこんだ。

すると再び姫がこちらを見つめしゃべりだした。

「驚かせちゃった？でも、私は王族よ。そのくらいの魔法を見破れ
なきゃやってらんないわよ。」

たしかに・・・ジンは納得した。

「じゃあ、何で師匠が覗いたときは何にも言わなかったんだ？」

「あなたに伝えたかったの。」

「・・・？」

「狙われてるのはあなた。そこから逃げなさい。」

「何で?!」

「理由はいずれわかるわ。後10分もすればそこに追っ手が来る。」

その前にそこから逃げるべきよ。」

「理由もないのに逃げるやつなんかないだろ。」

姫はため息をついた。

「わかった。じゃあ、こうしましょ。夕暮れまでに東のはずれにある古い教会で待ち合わせ。そこに来てくれたら理由を話すわ。」

姫があまりに真剣な顔で話すのでジンは頷いてしまった。

姫はニコリと微笑むとこちらにむけて手を伸ばし、鏡の壺を見えなくした。

ジンは奥の部屋にある戸の閉まった棚の扉をあけた。

その棚は古く、いたるところにくもが巣を作っている。

棚の一番はじにある箱をジンは取り出した。

箱にかぶさったほこりを手ではらうと机の上に置いた。

これは師匠がもしもの時のために薬を小分けにして閉まってあった物だ。

師匠、使わせていただきます。

ジンは箱のふたを開けると袋の中に入るだけ詰めた。

他にもとりあえず、2日ほどは困らないようにと食料をつめこみ表に力ギをかけ裏口から外に出た。

何で俺はあのノアとかいう姫の言う事を信じてるんだろ。

ぶつくさ言いながらジンが歩きだすと、さっきまでいた師匠の家の表の入り口が乱暴に壊される音が響いた。

ジンは恐ろしくなり駆け足でその場を立ち去った。

姫の言っていた教会とは15年ほど前にある一人の信者が狂ったように3日3晩叫び続け、最後に牧師と一緒に自ら教会に火を放ち焼け死んだといういわく付きの教会だ。

その噂のせいで教会を訪れる人間は皆無に等しい。

ただの噂だが大人たちにこの話を聞くとみんな口を閉ざしてしまう。ジンはその当時3歳だったので記憶もない。

できれば行きたくない場所1位だろう。

その教会まで歩いて軽く2時間はかかる。

家に一度戻って馬を借りたい気分だが、さきほどのことを考えると追っ手は家の前で見張っているだろう。くそっ。

師匠みたいに早く移動する陣をもっと早く教わっとくんだったな。

町を突っ切れば2時間で着くが、ジンはあえて遠回りをした。

用心には用心を！だ。

なんだかよく分からないが、よくないことに巻き込まれているのは確かだ。

なぜなら、黒いマントを身に付けた兵士がジンの写真を持って町中を探しているのが見えたからだ。

教会につく頃には真上にあった太陽もほとんど姿が見えなくなっていた。

「やっと来たわね。ついてきなさい。」

何がついてきなさいだ。

いくら姫だからって偉そうにするなよ。

姫なら姫らしくお城で優雅にお茶でもすすってればいいんだ。

ジンはぶつくさ文句をいいながらさびれた教会に入って行った。

教会の中はところどころ焼け焦げてはいるもののなかなかキレイだった。

天井には所狭しと天使の絵が描いてあり、きちんと整列された椅子には彫刻がほられてある。

ただ、教壇の上のステンドグラスだけが見事に破壊されていた。

「ここよ。」

姫はそう言うと言音の出ないオルガンの鍵盤を押すとオルガンのすぐ側の床が動き、地下への入り口が姿をあらわした。

一歩中に足を踏み入れると、中が急に明るくなり一番底までながめることができるようになった。

底はかなり深いところにありその先には倉庫のような場所が広がっている。

「あなたが何で追われているのか知りたいでしょ？」

「当たり前だ。」

翔の答えに姫が笑った。

「何がおかしい。」

「本当に何も知らないのね。」

「何が？」

「私ね、後1年もしたら死ぬの。でも、王の子供は私一人。だから死ぬわけにもいかない。そこで一人の人間の命と引き換えに私の命を復活させるの。」

「ふーん、それがどうした。かつてにやってくれ。」

「それがあなたなの。私の代わりに死ぬの。」

「はあああ？！何で俺なんだ。」

「あなただけが適合者なの。薬師は大切な国の宝よ。特にあなたは老子さまに認められた唯一の存在。でもね、国はあなたより私の命のほうが大事なの。」

「おい！適合者ってなんだよ。」

「誰でも代わりに死ねるわけじゃないの。魂にも形があつてその形がぴったり合わないダメなの。それがたまたまあなたしかいなかったのよ。」

姫はそう言つとポケットからりんごを取り出した。

「食べる？」

ジンは何も言わずにさしだしたりんごを叩いた。

「そんなに怒らないで。私だって誰かの犠牲によつて生き延びるなんてしたくないのよ。でも、私がいなくなつたらこの国が・・・だから協力して欲しいの。」

姫は真剣な顔でジンを見つめた。

「魔神を探して欲しいの。」

旅立ち

「魔神なんて本当にいるのかよ。」

ジンは馬車に揺られながらつぶやいた。

あの後姫は、

「魔神は全部で3人。今ある情報では魔神の一人が南の方にある島に住んでいるらしいわ。ここからならセントラル漁港に向かってそこから船に乗るといいわ。兵士の方は任せて。あなたの邪魔になるようなことはさせないわ。」

とか言ってたけど何度かつかまりそうになった。

まあそれでも追っ手はだいぶ減ったけど。

ジンはあたりを見回した。

どこもかしこも砂ばかり。

砂漠だからしょうがないけど。

海に向かっているはずなのにあたりには砂しかない。

ジンは運転手に声をかけた。

「本当にこつちであつてるの？」

「ああ。砂漠以外の道もあつたが……。」

「えゝ。そっちの方が良かったなあ。」

「でも兄ちゃんは今南の……たしか……オントロールとかいう島に行きたいんだろ？」

「そうだよ。」

「あそこらへんは普通の船じゃ連れて行ってくれねえぜ。」

「じゃあ島に行けない!?」

「行けないことはない。だから連れてってくれる船のいる方に向か
ってるんだ。そいつはこの砂漠のさらに先にいる。」

ふーん。

ジンは空を仰いだ。

しかし、変なことに巻き込まれたなあ。

普通じゃない船か。

海賊あたりか?

もうこのくらいじゃ驚かない。

海賊ならまだ。

だってこれから魔神に会いに行くんだぜ。

………生きてる人間なら何でもOK!

「兄ちゃん。ここでお別れだ。」
へ?

「もうすぐ迎えの者が来るからここで待つてな。」

そいうと運転手はジンを下ろした。

そこには大きな石でつくられた石造があつた。

ライオンに羽がはえている。

その姿はどうどうとしていて威圧感がある。

まわりはどこを見回しても360度全部砂漠だ。

唯一、帰っていく馬車だけが金色の砂漠の世界に浮かび上がって見
える。

迎えの者か……。

どこにも見えないってことは今日は確実に現れないな。

ジンは石造の足元に座り込んだ。

「重い。」

ジンは驚いて飛び上がった。

「どこから声がした？」

ジンはきよるきよるとあたりを見回した。
しかし、何も無い。

「どこを見ている？」

また主のない声が聞こえた。

俺の耳おかしくなったか？

それとも今まですべてが夢だったとか？

「おいっ！」

今度は声と一緒に肩に何か重い物がのった。

肩には灰色のまるで石のような腕が乗っている。

・・・いや、これは本物の石だ。

ジンはおそろおそろ腕をたどって腕の本体を見た。

「・・・せ、石造が・・・動いた・・・」

ジンの声は振るえ、その場に座りこんだ。

「腰をぬかしたか？無礼なやつだ。」

石造はそう言うと、長いつめをジンの洋服にひっかけるとひょいとジンを背中に乗せた。

「では、我が主のもとへ向かおう。」

石造が羽を一振りするとあたりの砂が舞い上がった。

足元が砂埃で見えなくなり、次の瞬間に石造は宙に浮いた。

ジンの思考回路はパンク状態だった。

今までこんな生き物見たことがない。

生きているのか？

ただの石なのか？

魔法で動いているだけ？

どんなに考えても答えは出てこない。

すると、石造が言った。

「私の名はグレート。主に石に変えられ海に沈んでいたところを助けられた。石から戻る事はできなかったが、こうして主のために主の客人の道案内をしている。」

ジンはますます分からなくなった。

石に変えられた？

ってことはこいつの石じゃない状態もいるんだ。

「あの、グレートさん。あなたの主は人間？」

「何を言っておる。私の主はキャルン族。人間より高等な生き物だ。」

「

砂漠の城

ジンはグレートの背中に乗ってしばらく行くと海が見えてきた。空高くから見る海は太陽の光に反射してまぶしいばかり。

「客人よ。我が主の棲家はあの海の近くにある。これから降下するからしっかりとつかまれよ」

グレートはそういうと体を右の方に傾け、降下し始めた。

ジンは下腹部がなんともいえぬ違和感をかもし出していたが、急降下の恐怖に声も出ない。

グレートが少しスピードを抑えたので下の方をのぞいてみると、大きなお城がそびえたっている。

あまりに大きくてジンは言葉を失った。

しかし、色が砂漠と同じ色をしておりこれではグレートが案内しなければたどり着くことは到底できないだろう。

城の真ん中に大きな中庭があり、まるでオアシスのようにそこだけが雰囲気違った。

そこにグレートは降りていった。

グレートが近づくと池の水が波立った。

ジンはグレートから降りると、グレートは言った。

「私が案内できるのはここまで。ここから先は別の者が案内する」

そう言うと、グレートはまた空高く飛び立って行った。

「ありがとう」

聞こえているかどうかはわからないが、ジンはつぶやいた。

ジンがあたりを見回すと、灰色の瞳をした猫がジンの方をじっと見つめた。

あれか？案内してくれるやつは。

ジンは猫の方へと向かった。

猫は何も言わなくてもわかるようで、ジンの１メートルほど前をジンの歩くスピードにあわせて歩いた。

城の中は大理石が敷き詰められていてとても涼しい。

ジンの耳に響くのは風の通る音とヒタヒタと二人の歩く音だけだ。

こんなに大きな城なのにだれも住んでいないのだろうか？

ジンは廊下の突き当たりの大きな赤い扉の前にたどりついた。

「この先で我が主はお待ちである。ここから先は一人で行くようにとのことである」

猫はそういうと、一礼して元来た道へ戻って行った。

ジンは深呼吸をするとドアを押し、部屋の中に入った。

部屋はとても広く、天井がとても高い。

壁も床も白で統一されていて唯一王座へと向かう絨毯だけが赤い色をしている。

絨毯の先の王座には椅子が一つ。

その椅子に座っているのは何とも言えぬ不思議な生き物だ。

体の形はジンと同じ人間の形をしている。

しかし、肌が全部青いウロコでできてきて指と指の間には水かきがついている。

腰に白い布が巻いてあり、その上に大きなベルトをつけている。

あのベルトは剣をかけるためにあるのだろう。

童話に出てくる人魚というより魚人だ。

「ジン、よく来たな」

魚人はそういうと、立ち上がった。

「我はこの城の主、名はルーシーと申す。そなたが来ることは何年も前から分かっていた。魔神に会いに行くのだろうか？」

ジンは黙ってうなづいた。

このルーシーという魚人には何か師匠と同じようなものを感じる。

きっと強い魔力の持ち主なのだろう。

「あの姫君のために仕事をするのは気に食わんが、おぬしのような優秀な命が絶たれるのはもっと気に食わん。」

「姫さまのことを知ってるんですか？」

「ああ、私に知らないことはない。おぬしがこれから会いに行く魔神は私の古くからの友人でな。君らのことを何年も前から聞いていたんだ」

魔神の友人？！

ならこの旅も少しは楽に済ませそうだな。

ジンは安心した。

「もう出航の準備はできている。しかし、この海はちと危険でな。魔物たちが眠る早朝に出航する。それまで部屋で休むといい。」
ルーシーはそう言うと言指をパチンと鳴らした。

すると再び猫が姿をあらわし、ジンについて来いと合図した。

ジンは一礼すると猫に続いて部屋を出た。

思っていた以上に早く魔神に会える。

ジンはうきうきしながら猫についていった。

猫が急に口を開いた。

「そんなに魔神に会えるのがうれしいか？」

「ああもちろん。これで寿命が延びる」

「魔神はとても恐ろしい。気をつけないと命を落とすぞ」

「・・・・・・え？」

「さあついた。この部屋は自由に使うがいい。外に出るのは勝手だが、迷子にはなるなよ。見ての通り今日は明日の出航のために乗組員は全員で準備をしていて城にいない。出発の時間に部屋にいなかったら置いていくからな。」

ジンの案内された部屋はとても質素だが使い勝手のよさそうな部屋だ。

大きなベッドが真ん中にあり、横には食事の用意がされていた。

ジンはおなががすいていたことに気がついた。

今日は今までの人生が凝縮されたようにいろいろなことがありすぎて空腹のことまで頭がいかなかったのだ。

ジンがパンにかぶりついていると窓から風が入ってきた。

今頃師匠は何してるのかなあ。

ジンは持つてきた粉を調合し始めた。

さすがに何も言わずに出てきたのはまずかったかなあ。

ジンは手紙を書くとするの形に折り、そのつるに調合した粉をふりかけた。

「必ず師匠のとこに行くんだぞ。もし他につかまるようなことがあったら手紙の内容を消し去ってくれ」

そういうとするは飛び立っていった。

手紙を書いたところで何かかわるもんでもないが、とりあえず師弟関係を絶たれないようにとジンは心底祈っていた。

ベッドで横になるとジンはすぐに眠りについた。

ジンが目を覚ますとあたりが暗くなっていた。
いったいどのくらい寝たのだろうか。

ジンは頭をかきながらベッドから降りた。

窓から入る風がジンの体を芯から冷やした。

ジンはテーブルクロスをマフラー代わりにまいて部屋から出た。

迷子にならない程度に……。

城にはどこにも明かりがついていないが、窓がたくさんあるので月明かりが入った。

昼間は白く見えた大理石の廊下が月の光に照らされて青白くとても不気味に輝いている。

昼間は聞こえなかった波の音がジンの耳で響いている。

ジンは中庭にたどりつくとき花壇のふちに腰を下ろした。

一度眠ってしまったからか眠れそうにない。

ここで待っていれば明日の出発の時に誰か通るだろう。

ジンが空を見上げると眩いばかりの星空が広がっている。

こんなにきれいな星空を見たのは初めてだ。

特に大きく輝く星がある。

ジンがその星を眺めているとだんだんと星が大きくなってきた。

ついに月にならぶほどの大きさになると、星が急に羽を生やした。

「ジーン！」

ジンは耳を疑った。

星がしゃべったからだ。

今日は動く石造やしゃべる猫、魔神と友人の魚人などあらゆる不思議な生物に遭遇したが星が話すのはそれ以上に……いや、比べ物にならないくらい不可思議なことだ。

星は月ほどの大きさを保ちながらジンの目の前で止まった。

「このへんでいいかな」

星はそういうとクルツと一回転した。

すると光っていた体から光が消え、星の正体が浮かびあがってきた。光が完全に消えるとウサギに羽が生えたような生き物が現れた。

「シシヨウから伝言預かってきた！！」

ウサギはジンのひざの上でぴょんぴょん飛び跳ねた。

「シシヨウこう言ってた！『頑張れ！』って」

「それだけえ？」

ジンはウサギの言葉を聞きがっくりと肩をおとした。

「後、『シシヨウは城で姫のところにいる。姫の病気がとうとう姫の体を蝕み始めた。もうそんなに長くない。心配だからこいつを送る。』

「だってサ！それでオレ来た！」

「師匠が君を？何で？」

「オレ師匠とどこでも会話できる！簡単なことしか伝えられないけど」

「ええ？！それってすごいことだよ！」

「すごい？すごい？オレ褒められた！」

「君の名前はなんていうの？」

「オレ、アース！」

ウサギはそういうと後ろを向いた。

そして、首につけていたバンダナをはずすと青く輝く魔方陣が出てきた。

ジンがウサギを抱き上げて魔方陣を観察していると急に声が聞こえた。

「ジンか？」

「その声は師匠！？」

「ああよかった。アースが無事にたどりついたのだな」

「ええ、今さつきこちらに到着しました」

ジンは懐かしい師匠の声に涙があふれた。

「おいおい何を泣いておる」

「今までいろんなことがありすぎて……師匠の声を聞いて安心したんです」

「お前には悪いことをしたな。本当ならわしがやるべきことをお前に押し付けてしまった。すまない」

師匠の言葉にジンは胸が詰まった。

「師匠、俺ががんばるよ。だからあの汚い家で待っていてくれよ」

「汚いは余計じゃ」

師匠の笑い声が小さく聞こえた。

ジンはウサギをきつく抱きしめた。

俺が頑張らなくちゃ。

これは俺の運命だもん。

師匠やほかの人を巻き込むわけにはいかない。

師匠は両親のいない俺にいろいろなモノを与えてくれた。

ジンは戦争孤児だ。

父も母も優秀な医者だった。

二人とも戦争に呼ばれ、幼かったジンは両親の古くからの知り合いの師匠のもとに預けられた。

そして、二人が帰ってくることはなかった。

身よりもないジンを師匠は快く迎えてくれた。

ジンの薬師としての素質を見抜き魔法も知らなかったジンに「から教えてくれた。」

俺はまだ師匠に恩返しをしていない。

だからそれまで死ぬわけにはいかないんだ。

ジンはウサギを放すと言った。

「俺、絶対死なないから」

もう空はうつすらと輝きだしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4583a/>

万華鏡

2010年10月10日15時45分発行